



Title	帰義軍期敦煌オアシスの耕地経営 ―「一族経営地」の起源と発展―
Author(s)	石川, 禎仁
Citation	大阪大学, 2020, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/76310
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

論文内容の要旨

氏 名 (石 川 禎 仁)

論文題名

帰義軍期敦煌オアシスの耕地経営
——「一族経営地」の起源と発展——

論文内容の要旨

本研究は、河西回廊の西端、タリム盆地との結節点に位置し、沙漠ルートのシルクロード上のオアシス都市として繁栄した敦煌について、特に中原王朝から自立し、独自色を強めた帰義軍期（9～10世紀）の社会の再構築を目指すものである。

従来より、敦煌オアシスとその外部世界、即ち瓜州など周辺オアシスやコータン王国、甘州・西州・伊州の諸ウイグル勢力、南山部落の遊牧勢力などとの往来や外交関係についての研究がおこなわれてきた。特に近年、坂尻彰宏氏は高低差によって、山地－水系－オアシスを組合わせて類型化した。こうした研究は、保柳睦美氏が周辺地域の高低差や水流などの自然環境を解説し、敦煌オアシスをその周辺地形に位置付けたことによって支えられている。保柳氏は、その詳細な地形解説によって、敦煌オアシスを三次元的に捉えるという「意識」を研究者に与えたと言えよう。

一方、敦煌オアシス内部に関しては、高低差はもとより、平面的な座標であっても、そうした空間認識が及んでいない。敦煌オアシス内部に建設された灌漑水路の配置は、李正宇氏によって綿密に考証され、地図の形で再構成されている。また、郷などの行政区分、敦煌城を始めとする各施設の位置、ソグド人聚落や氏族の「荘」などの存在を論じた研究も多い。しかし、敦煌オアシスで発生した些細な日常的行為の生じた場所に意義を見出し、追究した研究は少ない。

本研究は、これまで「巨視的」にしか捉えられなかった敦煌オアシスを、東西南北や郷・渠レベルで観測し、ある事象が「その場所」で生じた必然性を考察した。

第1章では、先史時代の大扇状地の末端から成長した小扇状地である敦煌オアシスの形状を、等高線間隔20mの詳細な地形図を用いて観察し、甘泉水（現・党河）の東西で地面の傾斜が異なることを述べた。東側はほぼ平坦な地面、西側は堆積斜面である。そのため、重力灌漑方式の渠道の送水能力は、西部地域の方がまさっていた。さらに、唐代前半期のP.3560v「沙州敦煌県地方農田水利施行細則」の行水順を手掛かりに、唐代前半期から帰義軍期には、北流甘泉水が平河口から北府渠・東河へと導かれていたことを明らかにした。

さらに、敦煌文書中から耕地の状態について述べた記述を集め、耕地保有者の社会的地位ごとに整理した。その結果、敦煌オアシスの耕地は、地域ごとに以下の様な特性をもつことが判明した：敦煌オアシス西部地域は用水が潤沢で、均田制の官人地や帰義軍節度使の私領が存在した。オアシス中央部、平河口付近～北府渠沿線には、僧統を始め寺院関係の耕地が散見された。北部地域は比較的水に恵まれた地域であり、水害が生じる程であった。南部地域も頻繁に水害が発生し、それに伴い塩害などを生じていた。こうした荒地は官が管理し、請射した百姓に与えたり、官が主体となって開発・運営をおこなった。オアシス東部地域は水不足や塩害を生じやすい傾向にあった。敦煌オアシス内の環境差については、かつて姜伯勤氏が上流・下流という一般的な理解から想定したが、本研究ではそれを地形図と敦煌文書から詳細に裏付けた。また、オアシス内部に差異があることは耕作民たちも認識しており、帰義軍期にはそのことを理由とした土地移動の請願や請射などが頻繁におこなわれた。

第2章では、吐蕃支配下でオアシス民が「良い」耕地を敦煌オアシス全域に求めて活動を開始したことを、これまで計口授田制度の存在を指摘するのに用いられていた土地台帳S.4491とS.9156から明らかにした。山本達郎氏が論じた如く、近隣郷内での交換・相互租佃は既に均田制末期にはおこなわれていた。吐蕃期にそれが活性化した理由は、複数の敦煌文書の内容が示す様に、吐蕃の在敦煌政権が、オアシス民の請願を受容し、また農田水利に消極的で、オアシス民の自主的活動を追認していたためである。こうして吐蕃期末期には、オアシスの一地域に耕地を集約させる者が登場した。彼らが重視したのは競争の末に獲得した「本拠地」であり、そこから遠く、オアシス辺縁のために流沙に埋没する耕地の価値は、彼らの中では総体的に薄れていった。

続く帰義軍期には、土地税徴収の対象が、個人から集団へと変化した。オアシス民はリスク回避などを目的として、

税を集団請負した。渠河口作税役と官柴草を組み合わせた渠人集団の活動も、その一種と位置付けることが可能である。吐蕃期から帰義軍期にかけては、さまざまな「集団」が社会のあらゆる階層に形成された時代である。その集団の中でも、血縁という最も原始的かつ強い紐帯を軸とする集団が「一族経営地」を形成した。これは、吐蕃期から帰義軍期の一箇所集中の耕地が、「父祖口分地」として子孫に継承された末の産物である。そこでは土地帰属の観念が個人の枠を超越し、血縁者全体の共有財産の如く認識された。また「一族経営地」という「本拠地」の創出は、耕作地域と居住地域の一体化を齎し、敦煌オアシスの各所に血縁者の聚住地が形成された。帰義軍期の敦煌オアシス内部で、地域ごとに姓の偏差が生じるのはそのためである。

第3章では、親子・兄弟など、血縁関係が認められるオアシス民同士の扶助行為の実例を通覧し、「家業」の継承や労働力確保の目的があったことを論じた。これは、沙漠地域のアアシスという厳しい自然環境下では、生活を成立させるための当然の行為であった。また、文化の交差点としての立地・歴史によって、敦煌オアシスは多様な価値観を兼有していた。敦煌の人々は、独自の社会通念を形成し、レヴィレート婚を含む扶助行為もその一つと言える。こうした扶助行為は、個人の利益追求にとどまらず、血縁という紐帯を重視し、規範とすることで、一族全体が繁栄する手段でもあった。帰義軍期の敦煌オアシスでは、一族繁栄を目的として、血縁者を成員とする集団が多数形成されていたことを、Дх.11038「索望社社条」を用いて明らかにした。さらに、従来、「民間自治」が進展した帰義軍期の敦煌オアシスで、普遍的におこなわれていたとされる「渠人」の活動の一部も、血縁者による利益追求行為であることを、S.6123「宜秋西枝渠人転帖」を用いて明らかにした。これまで内容解釈が十全でなかった「宜秋西枝渠人転帖」は、灌漑行水に合わせて水官を接待・協議する内容であった。また、それをおこなった宜秋西枝渠人は、日常的に公的業務に従事する技能者であり、節度使府の官員との関係を構築していた。さらに、転帖の回覧方法などから見て、この渠人集団は索姓の血縁者で構成されていた。これらを総合し、宜秋西枝渠人を、本稿では「一族経営地」に関する追利的・排他的活動の一端であると意義付けた。類似の組織による水利活動は、寺院所領でもおこなわれ、「集団」による諸活動が敦煌オアシス全域で展開されたと考えられる。しかし、こうした集団形成は、それをし得る者たちによってのみ果たされ、それをもたない渠・耕地も当然の様に存在した。

本研究は、耕地の問題に留まらず、敦煌文書中の既知の個別事例を、均田制末期から帰義軍期へと続く大きな流れの中に聯繫的に位置付けた。僅かな要素（地形の差）が社会全体に影響を及ぼすその様は、沙漠地域のアアシスの一事例とは言え、規模拡大に制限のある社会を論ずるにあたり、興味深い事例であろう。また、オアシス内部の「耕地評価」の差異や、「集団」とその「意志」の存在は、今後、敦煌オアシス社会像を再構成するにあたり、よく考慮されるべき要素となるであろう。

また、近年は現地景観調査や石窟調査などから新たな情報を獲得し、それらの成果を合わせて敦煌オアシス社会像の再構築を進展させようという不断の努力が為されている。本稿はその手段の一つとして、地形図の活用が有効であることを実践的に明らかにすることで、研究手法の模索に資した。

かつて、池田温氏は、敦煌が流通経済に果たした役割は「通過宿泊都市」としてであり、富の蓄積も涼州や西州（トウルフアン）といった他のオアシス都市を相当程度下回っていたと述べた。産業面において乏しい敦煌オアシス民は、或る者は交易に従事し、或る者は周縁～河西地域の他オアシスへと移住する。故に外部との交流の多い敦煌オアシス民は、農業・商業間で容易に生計を変え、定着性の低い、「流動性」がその性質であるといい、敦煌の人々は土地から遊離しやすく、両者の関係は稀薄なものとして考えられる傾向にあった。

本研究で明らかにした、オアシス内の一局所への執着は、昨今盛んな、敦煌オアシスの外部、周辺オアシスや遊牧世界との日常的な「つながり」を分析し、これら交流の中に敦煌オアシスを位置付ける研究の対極にある様に見えるであろう。しかし、「一族経営地」に代表されるオアシスへの土着性は、オアシス民にとって、いつかは自らが転ずるかも知れぬ流動性への対抗策であり、また交易や出稼ぎ従事者として外部に出て行く者たちにとっての「やすが」となる。敦煌オアシス民がもつという「流動性」は、「軸足」としての本拠地があつてこそ成立するものでもあった。流動・土着の両性は矛盾するものではなく、経緯の糸として敦煌社会を織りなしているのである。

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏 名 (石 川 禎 仁)			
	(職)	氏 名	
論文審査担当者	主 査	大阪大学 教授	荒川 正晴
	副 査	大阪大学 教授	松井 太
	副 査	大阪大学 准教授	坂尻 彰宏
論文審査の結果の要旨			
以下、本文別紙			

論文内容の要旨及び論文審査の結果の要旨

論文題目： 帰義軍期敦煌オアシスの耕地経営 ―「一族経営地」の起源と発展―

学位申請者 石川 禎仁

論文審査担当者

主査	大阪大学教授	荒川 正晴
副査	大阪大学教授	松井 太
副査	大阪大学准教授	坂尻 彰宏

【論文内容の要旨】

本論は、敦煌オアシスを支えていた水渠と耕地の分布状況を明らかにし、その上で吐蕃～帰義軍支配期（9～10世紀）において、これらがどのように運営・維持されていたかを「同族集団」による経営という観点から検討したものである。まず序説において本研究の視座を明確にし、続く第1章で敦煌オアシスにおける東・西・南・北・中央の地域ごとの耕地状況を、敦煌文書とともに、詳細な地図（10万分の1）に基づき明らかにした地形（高低差）による用水供給量の点から検討している。結論として、①西部地域は用水が潤沢で、均田制の官人地や帰義軍節度使の私領が存在すること、②オアシス中央部（平河口付近～北府渠沿線）には、僧統を始め寺院の耕地が散見されること、③北部地域は比較的水に恵まれた地域であること、④南部地域は頻繁に水害とそれに伴う塩害を生じていたこと、⑤東部地域は水不足・塩害を生じやすい傾向にあったことを明らかにしている。

第2章では、敦煌オアシスを支配した吐蕃および帰義軍政権における土地制度や税制度を取り上げ、それらが第1章で明らかにした地域の特徴を有する耕地の分布状況に与えた影響について検討している。本論では、吐蕃期の「計口授田制度」の証左として知られる2つの土地台帳（S. 9156とS. 4491）を分析し、両文書の間に見られる相違点に着目する。すなわち、S. 9156に登録される耕地は、ほぼオアシス西部地域のものであるのに対して、S. 4491のそれはオアシス全域に及び、しかも1戸あたりの面積は増大している、と指摘する。そして、この相違を時期的な変遷と捉え、土地所有に関して半ば放任的な施策を取る吐蕃政権のもと、敦煌オアシス民が「良い」耕地を敦煌オアシス全域に自立的に求めた結果であると推測する。また、吐蕃期から帰義軍期にかけては、土地税徴収も個人から集団へと変化したと捉えることができるとし、オアシス民側にとってもリスク回避の方策として、「血縁」という最も原始的かつ強い紐帯を軸とする集団が、「父祖口分地」を発展させ、「拠所」としての「一族経営地」を形成したとする。また地域ごとに姓の偏差が生じるのはそのためである、とも結論している。

また第3章では、帰義軍期における血縁者間の扶助行為に、「家業」の継承や労働力確保の目的があったことを論じている。その背後には厳しい自然環境、文化の交差点としての立地・歴史があり、敦煌オアシス民は多様な価値観を兼有し、独自の社会通念を形成していたという。例として、羽53「天復8年（908）呉安君分家契」に見える、レヴィレート婚に類似した事例を挙げる。さらに、一家族の利益追求にとどまらず、「一族」全体の繁栄を目指す目的で、Дх. 11038「索望社社条」が作成され、その文案は敦煌オアシス全体で用いられたとする。さら

に、従来は「自主的な」水利活動とされてきた渠人転帖について、S. 6123「宜秋西枝渠人転帖」（及び P. 5032 渠人転帖群）が一族を軸とした利己的活動、即ち「一族経営地」に関わる活動であることを指摘している。

最後に結語として、本論で検討してきたことを総括するとともに、これまで「流動性」を以て本質とされてきた敦煌オアシス民の「定住性」というべき部分に着目し、オアシス社会において血縁者らが形成した「一族経営地」の存在を明らかにしたことの意義を強調して、本論を締めくくっている。

【論文審査の結果の要旨】

本論の特長の一つは、利用し得る最も詳細な地図（10 万分の 1）を用いて敦煌オアシスの地形的特徴をまず明らかにし、そのうえで敦煌文書の検討を通じて、オアシス内に広がる耕地の地域的な偏差を明確にした点にある。従来の研究では、敦煌オアシスにおける都城を中心にした耕地の広がりやを掌握するのに、用水状況や土壌の質などの耕地の性格の相違を考慮せずに画一的に捉えることが多いが、本論では敦煌城を基点として「東・西・南・北・中央」の地域にオアシス内を分別し、水渠とそれに拠る耕地の状態を浮き彫りにしている。これまで、漠然とイメージしていた敦煌オアシスにおける耕地の一律の広がりが、地域ごとに特徴を伴う具体的な姿に転換したとも言えよう。とくに西部地域が最も豊かな土壌を形成し、ここに公権力が有する土地や有力一族の土地が集中していたことを明らかにし、加えて寺院が所有する寺田が、主として敦煌城の東西に広がる中央域にかたまる傾向にあったことを明確にした点は注目される。今後、敦煌文書を通じて敦煌の社会や経済、さらには寺院勢力の活動を検討するにあたり、この事実を踏まえて分析することになる。また本論は、オアシス社会における血縁・地縁に基づく人的結合といった「土着性」の問題に切り込み、そこから水渠を単位に形成されていた「渠人集団」の性格について、従来の見方を打ち破る新たな性格を付与しようと試みており、その積極的な研究姿勢は評価されて然るべきである。

ただし、史料に基づいて立論するにあたり、先に結論があり、それに合わせて史料を恣意的に解釈している部分が少なからず認められる。とりわけ、「渠人集団」に対する新たな性格として挙げている、①同集団が徴税請負の単位であり、②灌漑用水を供給する水渠を保全する「一族の利益のために結成された利己的な集団」であると規定することについては、さらなる慎重な検討を要しよう。①については、結論に導くことのできる積極的な史料の根拠が薄弱であり、なかでも渠を単位にして徴収する重要な「布」の納入について、渠人集団が関わっている痕跡がまったくないか否かは問題である。また②については、そもそもこの「一族」とは、どのような集団であったか、さらに究明する必要がある。本論では、西部地域に「囲い込み地」を形成する「索姓」あるいは「張姓」の集団を分析してゆくに際して、「索姓」あるいは「張姓」だけを検討の対象としているが、これは本論で議論している集団の性格を捉える上で重要なポイントになる。何故ならば、本集団を構成する一族は、kindred のような「親類」を範囲としていたように見られるからである。であれば、最初より「索姓」あるいは「張姓」だけを対象にすべきではなく、外族（母方の姓）も検討の対象とする必要がある。これを前提にすれば、「索姓」ないし「張姓」の「同族集団」が作る「渠人集団」に、他姓の人々が加わっている事実の説明を付けることが可能となる。他方で「索望社社条」は、この集団が父系の系譜を重視する lineage としての性格を併せもっていたことを示唆している。敦煌オアシスにおける「同族集団」のあり方については、オアシスを越えて名族の意識を共有する張氏一族のような例もあることを踏まえて、さらに検討を深めてゆくべきである。

とは言え、本論は、敦煌の耕地について地域的な偏差を明瞭にし、それを踏まえてオアシスの土着性について切り込んだ意欲作であり、今後の敦煌研究に裨益する部分は大きい。よって、本論文を博士（文学）の学位にふさわしいものと認定する。